



初夏を告げる一大田園絵巻 ユネスコ無形文化遺産登録・国重要無形民俗文化財

壬生の花田植

無形文化財合同まつり

2023年

6月4日(日)
広島県北広島町壬生



「壬生の花田植」の由来と その文化的価値

国立歴史民俗博物館 名誉教授 新谷尚紀
(千代田地区出身)

広島県西北部の農村地帯には、古くから「囃し田(はやしだ)」と呼ばれる行事が伝えられています。その起源は中世にさかのぼると考えられます。北広島町域の「囃し田」の記録が残っているのは江戸時代からです。近所の5から7戸の農家で「組」を作って、さら竹を手にしたサンバイ役の掛け声のもとに、大太鼓や小太鼓、手打ち鉦(かね)や笛でにぎやかに囃し、早乙女(さおとめ)が田植歌を歌いながら田植をしたことが書かれています。

とくに大規模なものが、大地主の家の田んぼで繰り広げられた「大田植」でした。数十人の早乙女や大太鼓をはじめとする囃し方、飾り立てた飾り牛も数十頭が出て、サンバイの指揮のもとに、豪華絢爛たる一大田植絵巻が繰り広げられていたのです。

北広島町の壬生と川東は、平安時代末期には厳島神社の荘園の一部で、古い由緒を伝えています。江戸時代後期から明治時代にかけて、壬生の大地主の所有する「三反大町(さんだんおおまち)」で行なわれた「大田植」は、この地方最大の「囃し田」として近郷にその名を知られていました。しかし、明治末ころには残念ながらいったん消滅してしまいました。が、その後、昭和初期に地元の壬生商工会の人たちが中心となって「壬生の囃し田」が再興されました。そのころから花やかで美しい田植えという意味で「花

田植」と呼ばれるようになりました。同じ時期、川東でも、下川東の有志の人たちの努力で「川東の囃し田」が再興されていきました。

この二つの貴重な「囃し田」が一緒になって、1976(昭和51)年5月に「壬生の花田植」として国の重要無形民俗文化財に指定されました。その後「壬生の花田植保存会」が結成され、2014(平成26)年からは「NPO 法人壬生の花田植保存会」が設立されて、今日まで保存伝承に努めておられます。その間、2011(平成23)年11月には、世界が注目する、ユネスコ(国連教育科学文化機関)の世界無形文化遺産として登録されました。

それは、戦後の1950年代半ばからはじまる(昭和30、40年代の)高度経済成長期を境に、農業の機械化や農薬利用が急速に進んだ日本の現代農村社会にあって、先人たちが伝えていた牛の代掻き(しろかき)や、早乙女の田植えなどの貴重な生業技術が、古風を伝える田植え歌や楽器の囃しなどの民俗芸能とともに、田の神さまに象徴される自然環境の恵みへの祈りと感謝の精神と、みごとに調和して保存伝承されていることが高く評価されたからです。

「壬生の花田植」は、北広島町壬生地区のみならず、北広島町はもちろん広島県や日本が世界に誇れる貴重な文化資源として、これからも関係者の努力によって末永く伝承されていくことでしょう。

田植歌

田植歌は四万八声(よんまんはっせい)もあるといわれ、大きく朝歌・昼歌・晩歌にわかれています。1日のうちに同じ歌を2回出すのはたいへん恥ずかしいこととされ、もしも同じ歌が出たら、サンバイさんだけ残して、他の者は田からあがって帰ってしまったも良い、という決まりまであったといわれています。



飾り牛

牛による代掻き(しろかき)の掻き方には決まりがあり、「鶴の巣ごもり」や「天の三ツ星」など複雑な代(しろ)がかれました。多くの牛を従えるオモウジ(先頭の牛)となるのはたいへんな名誉なこととされています。晴雨にかかわらずミノを着けるのは神様を迎えるためです。



サンバイ

サンバイは花田植全体の指揮をとる責任者です。作業の進行状況や早乙女さんの疲れなどに配慮しながら、緩急(かんきゅう)つけて田植歌を歌い出します。手に持つササラは煤竹(すすだけ)を割ったもので、陰陽・男女をあらわしています。



早乙女

「サ」は田の神様に関する言葉と考えられています。田植えに先立って咲く花がサクラ、田植をする月はサツキ、植える苗はサナエ、植える人がサオトメ、指揮をとる人はサンバイ、田植えが終わった祝いがサナブリ、すべてサがついています。



囃し

囃しは大太鼓・小太鼓・手打ち鉦・笛があります。サンバイの擦るササラにあわせて、時にはバチを宙に投げ上げたり、状態を前後左右にくねらせたりしながら、にぎやかに囃していきます。早乙女より囃しの人の方が多くなることもしばしばでした。



お問い合わせ (一社)北広島町観光協会 Tel. 0826-72-6908

主催 NPO法人 壬生の花田植保存会
後援 北広島町・北広島町教育委員会・(一社)北広島町観光協会
北広島町商工会・(一社)広島県観光連盟・中国新聞社
協賛 各事業所・団体

今年も多くの事業所・団体様から協賛いただきました。
誠に勝手ながら次年度のチラシに掲載させていただきます。